

SDGs 国連が2030年までに解決を目指す持続可能な開発目標。本稿に書かれた目標は「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」。

アトリエQ代表

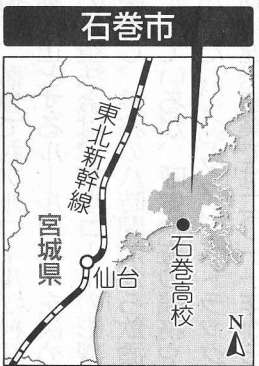
太田美智子さん



東日本大震災の避難所となった宮城県石巻高校で一緒だった子どもたちとの七

年間の活動を、記録集「まよわないように」にまとめました。その過程で見えてきたことがあります。

一つは、子どもも大人も、学校での防災教育や、地域・職場での防災訓練を通して必要な行動が身に付き、本番に生かせる「経験値」になっていったことです。津波を逃れた子どもたちは、避難の行程だけでなく、避難所でも、その後の活



た。不安や喪失などの心の整理にも表現を生かせたらと思いい取り入れました。

子どもはPTSDをあるがままに受け止め、仲間と支え合い、乗り越えていきました。そうした様子を観察し、記録することで状態を把握し、対応の手がかりとしました。子どもは、不安や混濁の状況を、態度や言葉、絵など、それ

子どもたちの記録冊子に

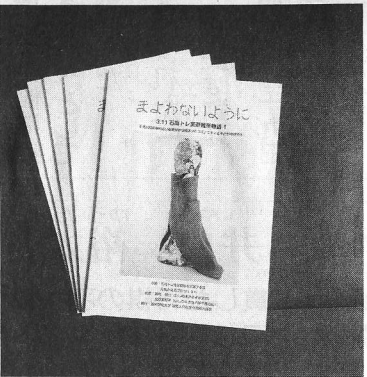
動でも主体的に動いてくれました。避難所での班編成や役割の提示の時に率先する人、追隨する人とスムーズな動きがありました。

二つ目は表現の活用の有効性です。震災一週間後から子どもたちに心的外傷後ストレス障害（PTSD）の症状が現れました。慎重な対応が必要だと考え、子どもの状態を知るため表現活動を通じてコミュニケーションを図りました

それが表現しやすい形で知らせてくれるようになりました。

私が長年創意工夫してきた表現は、遊戯療法や子どもの想像力や創造力を育むレッジョ教育の一部と重なるものでした。そして、避難所にチャイルドスペースを設けた取り組みは国連児童基金（ユニセフ）の「子どもにやさしい空間」研修で取り上げられました。

創造性を呼び起こす表現は、復興の礎となり、未来への懸け橋にもなります。それを伝えるために「まよわないように」を編集しました。今後は、災害や日常に生かしていただけよう発信していきます。「まよわないように」（千八十円）の問い合わせは=atelier.f.q@gmail.com=まで。



震災後7年間の記録をまとめた冊子『まよわないように』

※この連載は、NPO法人JKSKによる『結核プロジェクト』の協力を得ています。